

名作の舞台から

墨堤の桜並木

中央復建コンサルタンツ(株) 東京本社/鉄道系グループ 弥勒綾子



写真1 - 今も変わらぬ姿の桜並木

隅田川は、江戸・東京をはぐくんできた顔であり、下町のシンボルでもある。古くから多くの歌にうたわれ、浮世絵や芸術作品の舞台となってきた。

唱歌「花」は、武島羽衣によって作られた叙情調の詩に滝廉太郎が曲をつけた。明治の小学唱歌に取り入れられ、多くの人々に親しまれている。作曲した滝廉太郎は、東京生まれだが、役人であった父の転勤により、横浜、富山、大分など住まいを転々とする生活を送った。明治31年、東京音楽学校を卒業ののち、同校の嘱託になり、この時期に「荒城の月」や「箱根八里」を完成させた。明治34年、日本で初めてのピアノの留学生としてドイツに学ぶが、病に倒れ、帰国。23歳の若さで亡くなったのはその2年後のことだった。遠い異国で病床につき、軽やかなメロディーと墨堤に見事に咲き誇る桜を思い浮かべ、さぞかし郷愁の念にかられたであろう。

現在は、渡し舟にかわり、数多くの屋形船や観光用の水上バスが行き交う。江東区水上バスは、「運河コース」と「臨海コース」の2つが3月から11月まで運行される。曜日によっては貸切も可能で、大都会東京を違った視点から見る機会を得るために、多くの観光客で賑わう。ただし、花見の時期には吾妻橋半ばまで続く行列に並ぶ覚悟が必要である。

15ヶ所ほどあった隅田川の渡しは、今はみな橋に変わってしま



図1 - 安藤広重の描いた「隅田川堤の花見」

花

春のつちの隅田川
のぼりくだりの船人が
櫂のしづくも花と散る

ながめを何にたてつべき(以下二コーラス略)

作詞・武島羽衣 作曲・滝廉太郎



写真2 - 背後には、高層マンションやオフィスビルがそびえ立つ

い、数年前まで残っていた都営の佃の渡しを最後にして全部消えてしまった。最も新しい「勝鬨の渡し」は、最下流の河口にあったが、勝鬨橋の名の由来は、日露戦争のときに作られたためといわれる。昭和60年には、隅田川・荒川流域の市民グループが一堂に会し、「第一回隅田川市民サミット」が開かれた。潤いのある生活環境を求め、水辺のオープンスペースの貴重さが広く認識され始めた発端となる出来事であった。水質浄化や緩傾斜堤防への改造などを柱に掲げた「隅田川宣言」を採択するなど、市民と行政が一体となった好例ともいえよう。

隅田川を詠んだ歌は、「花」以外にも数多く存在する。たまには歌集片手に、都会の喧騒を忘れ、近代的な街並みを背後に控えた隅田川を散策してみるのも、また乙なものではなからうか。

(写真：1、3、4、5、初芝成應 2、筆者)

(参考文献)
「隅田川」島正之著、名著出版刊
「隅田川の今昔」鹿兒島徳治著、有峰書店新社

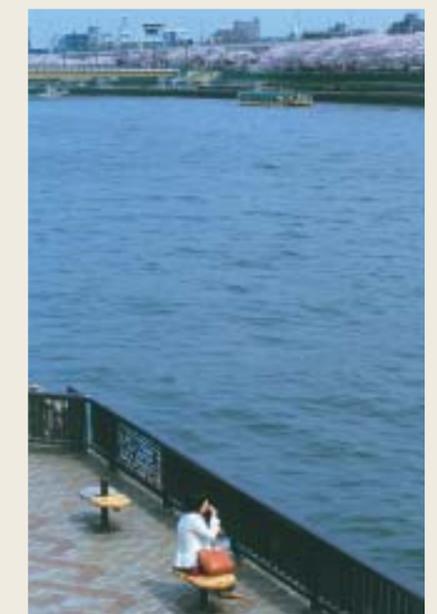


写真3 - その豊かな流れは見る人の気持ちを和ませる



写真4 - 江東区水上バス



写真5 - 言問橋近くから東岸のぞむ